

「イエスは言われた。『あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。』
そう言うてから、彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。誰の罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。』(ヨハネ二〇・二一―二三)。復活されたキリストとの出会いは、弟子たちを新たに变えました。復活キリストが彼らを「弟子」から新たな使命を受けた「使徒」へ変えられました。

キリストの出来事において実現された神の救いの福音、よいお知らせ、幸せのお知らせを信じ、洗礼を受けたわたしたちキリスト者は、その使徒職の使命に与っています。お互いの一致と交わりを深め、復活されたキリストとそれにもたらされた福音：平和、罪の赦し、永遠の命、神の愛を生き、使徒職の使命を果たしたいものです。「主キリストよ、わたしたちをお遣わしてください。」



『殉教者祭から』

聖心の聖母会 林 明恵

毎年栄国寺で行われている名古屋教区殉教者祭が、今年は布池教会で行われた。

今回私はこれに恥ずかしながら初めて参加した。渡された小冊子をパラパラと見ながら思い出していた。現在通っている学校で去年「日本キリスト教史」を学んだのであるが、それが断片的であるにせよ、実は内容を体で消化できず、信仰者として理解できない歯がゆさがあった。そこで今年はこの殉教者祭に是非とも参加し、日本の殉教者が教会でどのように語られるのか聞いてみようと思っていた。

小冊子『殉教者の思い、ともに祈る週間』(カトリック司教協議会殉教者列福調査特別委員会 編)は、現代に生きる私たちにとてもわかりやすく、関わりやすいように黙想風に書かれていた。

その内容は「八日間の黙想と祈

り」として、殉教者の歴史と教会の教えを学び、今に重ね合わせて黙想し、「殉教者の信仰に倣い、私たちの具体的な生活の目標を定め・・・祈る」ことができるように、毎日テーマがあり、テーマと関わる殉教者のことば・それに関わる聖書のことば・解説・祈りが添えられている。

私の中の消化不良、それはどうして殉教者たちがそこまでして信仰を守らなければいけなかったのかということであった。様々な文献にあるキリシタンの迫害状況は、それはそれは受け入れがたい、過酷なものである。なぜそこまでしなければならぬのか。人間は生きるために生まれたのではないのか。神は信仰が強い人たちには、こういう死に方を与えるのか。そもそも神は、なぜそんな試練を人間に与えたのか。それに、遠藤周作の『沈黙』に出てくるずるいキチジローや、元宣教師のフレイラ師のような生き方が案外今を生きる私を映し出しており、弱い生き方ではあるが共感できたりするではないか。このようにして生き延びるのが、生きる処世術であり、

それが常識であり、ずるさを会得することで「蛇のように賢く、鳩のように素直に」(マタイ一〇・十六)の「蛇」の生き方なのだと居直ってしまっているこの世の中がまかり通っているではないか…!

この小冊子は第一日目から容赦なく歪んだ理解を浮き上がらせ、まるで洗い清めるかのようにはつきりと信仰を表し、井の中の蛙のように狭い所でもがいていた私にまったく新しい光を当てて、「不退転の意志を持ってイエスに従う生き方を選ぶこと、これが殉教です。」(P18)

今現在、自らの信仰を告白することで生死を問われるという状況にはない。しかし日常のちよつとしたことの中でもはつきりと自分の信仰が表せるのは、小さな殉教かもしれない。例えば、宗教を異にする人たちとの関わりでたまたまそのような話になった時でも、自信を持つてはつきりと自らの信仰を打ち明けるのは逆に相手に対する誠実さであり、真理を語ることになったりする。はつきり言う事で、案外相手は素直にありのま